

第3回徳島県公立高等学校の在り方検討会議入試制度部会 会議録

- I 日時 令和8年1月27日（火）午後1時30分から午後3時30分まで
- II 場所 徳島県庁9階 教育委員室
- III 出席者 全委員8名出席
（委員）
金西計英委員、木屋村浩章委員、滝川尚委員、竹内敏委員、鳴川幸恵委員、
松本和基委員、松本賢治委員、山下真司委員
（県）
教育次長、教育創生課長 ほか

IV 次第

- 1 開会
- 2 委員紹介
- 3 議題
（1）多様な能力を評価する選抜方法に関すること
（2）高校入試における Web 出願システムについて
（3）その他
- 4 閉会

<配付資料>

- ・資料1 第2回徳島県公立高等学校の在り方検討会議 入試制度部会の概要
- ・資料2 多様な能力を評価する選抜方法に関すること
- ・資料3 高校入試における Web 出願システムについて

V 会議録

（開会）

<金西会長>

それでは、第3回目入試制度部会を開きたいと思えます。よろしくお願ひいたします。本日用意している議題は2つでございます。まず1番目の、「多様な能力を評価する選抜に関する事」ということで、まず事務局からご説明をお願ひいたします。

（議題）

事務局より、「資料1」「資料2」「参考資料」に基づき説明。

<金西会長>

ありがとうございます。ただいま事務局から3つの観点が示されましたが、まずは前半の2点について議論します。「新たな募集要件の設計」と「高校の特色を反映させる制度の方策」です。3点目の「学区撤廃後の機能や日程等の運用条件」については、後ほど議論します。現行の育成型選抜の改善、あるいは制度自体の廃止も含め、これまでの議論を踏まえたご意見をお願ひします。

<木屋村委員>

質問です。第1回部会で「運動部中心に偏っている」との指摘がありましたが、現状の育成型選抜では、スポーツ・文化を問わず、高校側が中学校に出向いて「個別面談」を行っていると思います。該当生徒や中学校の教員を交えて実施していますが、結果的に「面談を受けた生徒が出願・受検している」形になっているのではないのでしょうか。多様な生徒の強みを評価する上で、現行制度が適切かどうか気になっています。中学校の先生方に、育成型選抜に関する進路指導の実情をお聞きしたいです。

<金西会長>

ありがとうございます。確認ですが、その「個別面談」は入試とは別に行われるものですね。

<木屋村委員>

はい。参考資料1 ページ下段に記載のある「個別面談」です。「合否の判定は入学者選抜において行うものであり、個別面談を受けても合格は保障されるものではない」という形で行われています。

<金西会長>

高校の先生が中学校へ出向くのですね。負担も大きいと思います。中学校側の状況はいかがでしょうか。

<滝川委員>

個別面談を受けても合格は確約されないという前提で、生徒は面談に臨んでいます。しかし、多様な生徒が出願できているかという点、面談を受けた生徒がそのまま受検するケースがほとんどです。面談を受けていない生徒も受検は可能ですが、そもそも枠に限りがあるため、「自分にチャンスがあるのか」と不安を感じ、思い切って受検できない現状があると思います。

<松本賢委員>

個別面談は高校側からの声かけの解禁日というのがありますか。

<木屋村委員>

参考資料1 ページの下の方に記載されていますが、「実績重視枠」は7月1日、「活動重視枠」は8月1日からです。毎年同じだと思います。

<松本和委員>

高校から連絡があり、面談を受けるかどうかをまず保護者と本人に確認をします。中には第1志望、第2志望でないので断る生徒・保護者もいます。話を聞く場合は日程調整の上、保護者・担任・部活動顧問などが同席して面談を行います。「合格を確約するものではない」と確認し、高校側のプレゼンを受けた後、1週間を目途に受検するかどうかを回答します。

一方で、面談を行わない「地域貢献」などの枠もあり、ボランティア活動や阿波踊りなどの実績を自ら申し出て受検する生徒もいます。必ずしも面談を受けた生徒だけが受検しているわけではありません。スポーツでも、面談なしでチャレンジする生徒もいます。

<山下委員>

教えていただきたいです。今の「個別面談」はなかなか他県ではあまり聞かないものですが、必要でしょうか。必要だからあるのだとは思いますが、そもそもの目的は何でしょうか。

<木屋村委員>

過去にはこのような個別面談はありませんでした。入試に関わることで、部活動顧問間での不透明な接触トラブルなどを避ける目的があるのではと推測します。

<山下委員>

ありがとうございます。前回の議論の中にもありましたが、「行ける学校」ではなく「行きたい学校」を目指す理念に寄せるのであれば、生徒が希望する場合の面談であれば良いと思います。「主語は誰か」と考えた時、「生徒の主体的な学びを実現する」という名称や仕組みと、生徒の気持ちが一貫している必要があると感じました。

<滝川委員>

「個別面談」をせずに受検する生徒もいますが、競技によっては募集枠がある高校が限られています。「行きたい高校に自分の専門競技の枠がない」という問題も生じています。学力もつけ、部活動も頑張った生徒が、その活動実績を活かして志望校に行きたくても、枠がなければ選べません。どの学校にもそうした枠があれば良いと思います。

<金西会長>

今のお話ですと、この高校に行きたいけど、そこに自分が今までやってきた部活がないみたいなケースはあるということですね。

<滝川委員>

あると思います。

<金西会長>

あるんですね。そうすると、事前の面談は、こうしたミスマッチを減らすことに寄与しているということですね。

<山下委員>

そうですね。現実的にはあると思いますし、今後ますます生徒数の減少が加速していく現状を踏まえれば、部活動の維持がなかなか難しくなってくる。徳島県内の全ての高校において、部活動や学びの場を均質にする必要はないので、裏を返せばそれぞれの学校がスクール・ポリシーに基づいて「うちはこの魅力だ」「うちはこの部活で頑張るんだ」

「うちは探究学習で」と特色を出すことで、生徒が「行きたい学校」を目指し、主体性が育まれる方向へ進むのが良いのではないのでしょうか。

<鳴川委員>

そのことに関連してですが、参考資料1ページの「募集人員」について質問です。普通科は7%以内、専門・総合学科は14%以内とされていますが、募集定員の増減により活動重視枠の募集人員も変動します。この割合の根拠は何でしょうか。

<事務局>

育成型選抜における「募集人員」の割合の根拠についての御質問ですが、平成23年度の「特色選抜」導入時に割合についての検討がされました。県大会やブロック大会等での優秀者の実態が普通科約6%、専門学科約13%であったことを踏まえ、バランスを考慮して設定されました。その後、令和5年度の「育成型選抜」移行時に、文化・ポリシー枠拡充のため各1%上乘せし、現在の7%、14%となりました。

<金西会長>

ありがとうございます。歴史的な経緯の積み重ねがあるようですが、流れとしては少し増えているということですね。

<事務局>

そうですね、育成型選抜の時は増えました。

<金西会長>

少子化で母数が減って、募集定員が減っているので、実数としては減っていますが、割合としては増えているということですね。

<山下委員>

他県では、一般選抜とは違う選抜の枠組である育成型や特色型のような選抜については、学校裁量で割合を決められる例が多いと思います。今後は割合を変動させたり、学校に裁量を委ねたりすることも考えられるのではないのでしょうか。また、育成型選抜の実質倍率は1.24倍と高く、生徒から支持されている枠組みと言えます。生徒の学びたいこと、やりたいことを応援するため、枠の変動や、学力検査を課すかどうかの裁量も含めて検討することがポイントなのかなと思いました。

<金西会長>

ありがとうございます。高校側としては裁量があったほうがよいのでしょうか。

<鳴川委員>

私はその方がいいと思います。本校は部活動が盛んであるという特色を持っていますので、部活動も学校の特色によりますが、学校裁量を委ねていただける方がありがたいなと思っています。

<金西会長>

木屋村委員はどうお考えになりますか。

<木屋村委員>

学校や地域によって実情が違うと思うので、一概には言いにくいところです。1点質問があります。この参考資料の中の倍率について、「1.24倍」という話がありましたが、前のページの「1.01倍」との違いは为什么呢。というのも、先日の報道で、1倍を切ったという話が出たものですから、気になります。

<事務局>

「1.24倍」というのは出願者数に対する合格者数の割合のことで「実質倍率」を示しています。また、「1.01倍」というのは募集人員に対する出願者数の割合のことで「出願倍率」を示しています。募集人員750名に対して、出願者数が757名ということで、募集人員を超えて出願がある学校もある一方で、募集人員を満たさない学校もありますので、全体で平均すると「1.01倍」になるということです。

<木屋村委員>

学校によって偏りがあるということですね。

<事務局>

はい、そのとおりです。

<山下委員>

徳島県の場合は募集人員が先ほどの7%、14%で決まっているので、先ほどの参考資料の1.01倍に当たるところは、限りなく1倍になるのではないのでしょうか。

<金西会長>

育成型選抜は募集人員が決まっているので、出願には慎重になりますよね。

<木屋村委員>

私が最初に質問したかったのは、大学のスポーツ推薦の場合は生徒が行きたいと思うところに出願しているケースが多くて、競争がすごくあるわけです。中学校から高校への出願の場合は、不合格者をできるだけ出さないようにという配慮もあると思いますが、実質は「個別面談」をした生徒が受かっているような結果になっているように思えます。事実上、中学校の進路指導との関わりで、生徒が行きたいところに手を挙げて受ける仕組みになっていないのかもしれないという事が気になっています。資料1の概要にもあった、「多様な資質・能力を適切に評価する」ことにつながってくると思います。

<金西会長>

「個別面談」をしないと合格しないってことはないですよ。

<滝川委員>

「個別面談」をせずに受検をして合格するケースはあります。「個別面談」をせずに、運動分野で合格する生徒もいますし、文化・ポリシー分野も増えてきているので、そちらで受検をして合格する生徒もいます。ただ全体から見ると少ないのかなと思います。

<松本和委員>

行きたい学校を受検するかというと、そうでないこともあります。第1志望の学校から面談の話が来ずに、第2、第3志望の高校から話に来て、話を聞くうちに「受検しようかな」となって、受検している生徒もいると思います。私が一番困ると思うのは、この面談期間が非常に長いために、夏休み中に面談をして受検しますとお答えした後になって、第1志望のところから面談の要請があった場合です。その時はお返事をしているのにどうしようかとすごく悩むことがあります。

<金西会長>

「個別面談」はあくまでも事前の面接でも何でもないってことではないですよ。

<木屋村委員>

スポーツの分野は特にですが、県外からも結構声かかる生徒もいますので、面談の解禁日の設定が難しいところだと思います。

<金西会長>

県外からのスカウトに先に持っていかれてしまうと、県外へ流出してしまう事情があるわけですね。城東高校の陸上部は全国大会に行っていますよね。行きたい高校へ行って、自分たちで頑張るケースもあるということですよ。

<木屋村委員>

レアケースです。

<山下委員>

これは生徒が面談を希望しても高校側が対応できないのはスケジュールの問題なんですよ。

<金西会長>

さきほどの個別面談の依頼が来ないケースについてですね。

<松本和委員>

基本的に中学校は個別面談を受ける側なので、高校から連絡をいただいたら面談するという形で、中学校から面談をしてくださいということは原則してはいいです。

<木屋村委員>

ほとんどの高校で選抜要項が決まって、例えばある種目で4人程度募集となったら、個

別面談としては4人以内に依頼する。募集人員を超えて5人とかに依頼はしていないと思います。

<山下委員>

現状の話もあると思いますが、今後ここでいう育成型選抜を運動部だけでなく、もっと生徒のそれぞれ学びたいこと、やりたいことに広げていくなれば、この「個別面談」のシステムが運用に乗るかどうかの検証が必要ではないかと思います。今はおそらく運動部を割と重視されているので成立していると思います。今後の運用については疑問を感じているところです。

<金西会長>

「個別面談」に関しては運動部以外の面談は行われていますか。

<鳴川委員>

本校は阿波踊りがありますけれども、阿波踊りでは行っていません。

<金西会長>

原則的にはスポーツ系、運動系が中心ということですね。

<木屋村委員>

城東高校では文化でも「個別面談」をやっています。

<金西会長>

スポーツ系に限ったことではないということですね。語学分野などの募集もありますから、広い分野で個別面談をやることもあるということですね。実際の制度を作る場合に、運用の形態をどうするかが議論の対象になりますね。

<木屋村委員>

ニュースでも出ていたと思いますが、愛媛県が徳島県の育成型選抜に当たるような特色選抜を、学力検査を課さずに小論文や面接等で実施しているようです。どのように実施しているか気になりますが、そういう県もあるようです。

<金西会長>

調査書は加味されているのでしょうか。

<木屋村委員>

私立の高校が多くある県と、そうでない県がありますので、一概にはいいにくいところがあります。

<鳴川委員>

今の話に近い話になりますが、参考資料の4ページの「育成型選抜実施概要一覧」にあるように、徳島県の育成型選抜には「活動重視枠」と「実績重視枠」があります。「活動

重視枠」は学校裁量であり、「実績重視枠」は県の指定を受けた競技・分野になります。私が先ほど言いました阿波踊りは「個別面談」をしていないというのは、「実績重視枠」のことですけれども、「活動重視枠」で文化・ポリシー分野となると「個別面談」されていると思います。このカテゴリー分けの違いがあると思います。

7%というのは「活動重視枠」の方であり、「実績重視枠」は徳島県が「徳島競技力指定校」として指定して実施しているので、これは7%の中に入っていません。同じ普通科高校でも7%内に全部入る学校と、「実績重視枠」で県からの指定でさらに募集できる学校とで募集人員に幅があるので、今後整理をしていただけたらなと思っています。

<金西会長>

この「活動重視枠」と「実績重視枠」の違いはなんでしょうか。

<事務局>

「徳島競技力指定校事業」という部活動の強化に関する事業があります。その事業で21校31の部活動を指定しています。検討委員会を開いて、強化しようとする競技やその競技に適した学校を検討するという事で現在行っております。

<金西会長>

県のスポーツ振興の観点からということですね。

<事務局>

はい。

<金西会長>

募集人員は7%とは別枠ですね。

<事務局>

はい。

<金西会長>

見直しはありますか。

<事務局>

今の指定は令和5年度からのスタートで、令和9年度までの5年間の指定です。

<金西会長>

少し時間が押していますが、もちろんスポーツも重要ですが、育成型選抜の枠を広げるとしたら、どのような方法があるでしょうか。各高校でスクール・ポリシーを決めていますが、多様性を考えますと、スポーツ以外に広げていくような方向も必要かと思いますが、ご意見はございませんか。

<竹内副会長>

私もそのことを考えていました。参考資料の4ページ以降に記載がある文化・ポリシー分野の中で、星印で示されている「スクール・ポリシーに関連する募集」を見てみると、西部や南部の普通科高校で、例えば、「地域貢献活動」や「奉仕活動」、「社会貢献活動」、「地域探究活動」などの項目で募集がありますが、具体的にどのようなスクール・ポリシーに基づいて、どのような生徒を求めているのでしょうか。

<事務局>

普通科高校でのポリシー枠の内容についての御質問がありました。例えば、川島高校では「社会貢献活動」という分野で募集をしています。出願要件としては「生徒会活動や部活動等で継続的に活動し、その活動の中で地元地域や社会に貢献する活動をした経験を持つ者」とされています。また、阿波高校の「地域探究活動」では、「身近な課題に関心があり、グローバルな視点に立って問題解決しようとする意欲を持ち、リーダーとして活動した実績を持つ者、かつ英語検定の3級以上を取得した者」などが挙げられています。このあたりは、スクール・ミッションの中にも「地域探究活動」が掲げられていますので、それに沿った形での取組になっています。

<竹内副会長>

学区制が廃止される方向性において、徳島市内の普通科高校で、こういう募集というのは難しいでしょうか。育成型選抜は部活動の枠というイメージがありますが、普通科でスクール・ポリシーに基づいて生徒を募集するためにどんな方法があるのかを探っていくことも大事だと思っています。

<金西会長>

そうですね。多様性ということが求められていますので、いろんな枠を広げるという議論がある方がいいと思います。

<木屋村委員>

高校教員の意識としては、育成型選抜入学した生徒は学校の教育活動の中で役割を持って従事してくれる、活躍してくれる、そういう生徒だと捉えやすいです。英検3級を持っているからといって学校の中で国際交流のようなことを活動したいのであれば、入るだけの手段なのかなと思います。だから部活動が分かりやすい。

<竹内副会長>

育成型選抜は部活動をイメージした制度のように感じますが、中学校の部活動が地域移行の方向性にある中で、5年先を考えたときに、部活動だけを軸に考えていくのでいいのかなと疑問に感じています。

<金西会長>

多様化の中で、知識で学習の度合いを評価するというのは昔からのわかりやすい方法ですが、学習指導要領も改訂されていて、単に知識をたくさん覚えているとか再生が早くで

きるとか以外の、問題解決能力とかコミュニケーション能力とか、まさにその多様化の流れがありますから、知識以外の枠というのは残しておいた方がよいと思います。スポーツもその一つの方法だと思います。学習者の希望と多様性を合致できるような方法があればよいと思います。

募集人員は各高校で運動分野とポリシー分野で分かれていますか。分かれていますね。評価する側も難しく、スポーツとかだと実技がありますが、分野によっては、例えば「地域貢献活動」だと実技というわけにはいかないですから。

<山下委員>

この参考資料を拝見した時に、結構いろんなテーマで育成型選抜が実施されていると私はすごく評価しています。運動分野の生徒たちは、その後どのように活躍していくかがわかりやすい。文化・ポリシー分野で入学した生徒たちが、その高校でどのような学びや生活を送ることができているかというところで、充実感があるのであれば、これを徳島県ではもっと推進していく方向でよいのではと思います。エビデンスはなかなかないかと思いますが、そのあたりの実感値があるのであれば、教えていただければ、中学校の立場からもより勧めやすくなるのではと思います。

<鳴川委員>

鳴門高校にはボランティア活動の枠がありますが、実際昨年度はボランティア活動への出願はないと聞いています。

<滝川委員>

もしボランティア活動で受検生がいた場合、試験の方法はどのような形になりますか。

<鳴川委員>

試験方法は学力検査と面接、調査書でルール通りに判断しています。

<滝川委員>

ボランティア活動においては、自分がしてきたボランティアをアピールする場があるということでしょうか。

<鳴川委員>

活動実績は受検に際して提出していただいていますので、実技はないです。

<滝川委員>

では実技に代わるような自己アピールの場もないということでしょうか。

<鳴川委員>

はい。活動実績で評価をして、学力検査と面談とあわせて総合評価をします。

<滝川委員>

重ねて確認ですが、書類で実績を評価する以外に、本人が自分の活動についてポートフォリオのような形式でアピールする場はありますか。

<鳴川委員>

それは特にはないです。提出された書類を点数化しています。

<山下委員>

アドミッション・ポリシーはきちんと運用されていると思います。私の質問の意図は、その後のカリキュラム・ポリシーやグラデュエーション・ポリシーにどう繋がるかということと、さらに高大接続に繋がっていくかが重要だということです。「地域貢献活動」や「地域探究活動」がやりたくてこの学校を選んで、それがカリキュラムにきちんと落とし込まれていると、生徒それぞれに学びたいことやりたいことを実現できる、まさに学区制がないとしても、徳島県全体で子どもたち一人一人が学べる高校づくりに近づくとと思います。

<竹内副会長>

山下委員のお話を伺い、私も小中学校と高等学校の教育活動がもっと繋がる方法はないかと考えています。例えば小学校では「地域学習」や「ふるさと学習」を通して地域の良さを再発見し、地域と連携した活動が行われています。中学校でも総合的な学習の時間に、自分たちの市町村や徳島を見直し、地域活性化を考える学習を実施している学校もあります。こうした学びの中で、地元に残り地域を良くしたいと考える生徒も育ってきています。そのような生徒が高校で、人口減少の課題や地域の特性を生かした活性化の方法をさらに学びたいと思ったとき、小・中・高をどのように繋ぎ、どのように育てていくのかが重要です。入試制度を含め、高校のスクール・ポリシーやカリキュラム・ポリシーの中で、小中学校の教育活動とどう繋げていくのかを考えていくべきだと感じました。

<松本賢委員>

多様な育成型選抜の実施ということを考えれば、部活動の地域移行、今は地域展開と表現しておりますが、土曜日・日曜日の部活動をすべて地域に移行していこうということで、来年度から3年間を前期期間、令和11年からの3年間を後期期間とし、この6年間で予算もつけております。ただ、土曜日・日曜日となりますと、働き方改革も関係しております。その後、平日の部活動にも言及していくという国の流れになっていると認識しています。その流れのもとで多様な育成型選抜というのを考えていかなければいけないと思います。その上で、そのときの徳島にあったルール作りが必要かと思えます。その後、各高校でカリキュラム・ポリシーやグラデュエーション・ポリシーに落とし込む形でつくっていくと、高校独自の特色がでるのではないかと考えています。

<金西会長>

ありがとうございます。

<木屋村委員>

過去の入試制度には前期選抜・後期選抜というのがあって、前期で30%の募集でした。あの時は中学校も高校も大変苦労したと思いますが、前期の定員に対してたくさん受けに来て、その後、中学校では多くの不合格者への対応をする必要がありました。その時はまさに生徒は受けたい高校を受けるという感じでした。受けたい高校を1回は受けられるという意味ではメリットがありましたが、今はどちらかと言うと少数精鋭で育成型選抜を受けていることになっているのかなと思います。もし募集分野の枠を広げるのであれば、今のスポーツは残した上で、何か別の枠を広げる工夫をする方が、混乱が起きにくいと思います。いろんな生徒たちが希望できる入試であるということが大事であると思います。

<金西会長>

ありがとうございます。今いろいろご議論いただいた中でも、育成型選抜そのものを廃止するというような話ではなく、これからの多様な学びで中学生が行きたいところに多様な選択肢を提供するということが、現行の制度の中でスポーツに偏っている部分の問題点は指摘されたと思います。特にこの「個別面談」については、無くすというよりも、在り方を今後どうするかということが検討事項だと思います。文化・ポリシー分野をもっと拡充できるとか広げていくような方向で検討できればいいのではないかというお話が出たと思います。それが、それぞれの高校のカリキュラム・ポリシーと接続できて、学科などのカリキュラムに収まればよいということも含めて、今後、分野の拡張があればよいとの意見が出ました。

それでは次の議題の日程についてです。事務局から説明をお願いします。

(議題)

事務局より、「資料2」「参考資料」に基づき説明。

<金西会長>

ありがとうございます。ここに示されているのは滋賀県の例で、別に滋賀県のようにするという話ではなく、今徳島県でも行われているような育成型選抜と一般選抜をまとめて1回にしてしまう方が、高校の現場の方も中学校の現場の方も入試業務が軽減されるのではないかなという点です。これに関して皆さんのご意見いかがでしょうか。

<木屋村委員>

日程については、前期選抜・後期選抜をしていた頃に、中学校から前期合格者が教室にたくさんいる中で指導をするのが大変だと聞いたことがあります。中学校のご意見も聞く必要があると思いますが、あまり早くに実施することになると、中学校にとっては生徒指導の面で大変になると思いますし、短期間に保護者との面談や出願が集中してしまい、中学校の業務が徹夜状態になるかもしれません。

<金西会長>

ありがとうございます。現状の一般選抜に向けての三者面談の様子から、日程をまとめることによって、業務的な負担も大きくなるということですね。

<鳴川委員>

1回にまとまることで、短時間の間に色々な形の出願をすることになるので、これまでの育成型選抜にさらに多くの子がチャレンジできる枠組みができて、それがさらに1箇所にとになると、日程的に厳しいかなと思います。また、先ほど出た新しくチャレンジできる仕組みというのは、生徒が学校やそれまでの自分の経験の中で積み上げてきたものを使ってチャレンジする場であって欲しいと思います。徳島を見直すとか地元を見直すとかいうことについて、自分がやってきた活動や積み上げたもので試験に望むというような形のものであるとすれば、やはりそれが一般入試と1つになるとちょっと考えにくいと思います。それと徳島県は私立の高校が少ないという独特の実情もありますので、考慮する点もあるかなと思います。

<木屋村委員>

現在の一般選抜の日程では、学力検査を3時ぐらいまでやって、その後採点業務に入ります。採点にミスがあってはならないですし、不公平さが生まれていけないので、夜の10時半ぐらいまで時間をかけて採点をしています。さらに次の日には面接が続きます。そういう現状があるので、負担の部分は考える必要があると思います。

<金西会長>

なるほど。1回にまとめることで保護者にとっても混乱するところがあると思います。現状の日程でも窮屈なので、2回に増やすのは難しいとのご意見もありました。まとめる必要はなさそうでしょうか。

<木屋村委員>

前回の資料に出ていた複数受検できるDA方式、あのような方式を絡めて実施するのは、ありだと思います。それと、愛媛県は一般選抜の学力検査を2日に分けて実施していて、1日目の学力検査を午後は1教科にして、2日目に残りの教科と面接をする形にして、分散しているようです。日程をまとめるのであれば、そんなやり方もあるのかなと思います。

<金西会長>

育成型選抜と一般選抜を1回にまとめる場合は、1日では不可能なので、1日目は学力検査をして2日目に面接や実技をすることになると思います。育成型を受ける学生はおそらく一般選抜にも出願する形になりますので、面接の扱いをどうするかという問題なども発生するので、1回にまとめるとなると現実的になかなか大変ですね。

<松本賢委員>

徳島県の現行の制度に、滋賀県の制度等を参考にして、木屋村委員がおっしゃったように、DA方式を導入することも1つの方法だと思います。今後の課題としてメリット、デメリットを話し合いながら決めていくというのでいかがでしょうか。そして、新たな制度によって、中学校の進路指導も変わってくるのではないかと感じています。

<金西会長>

ありがとうございます。もちろん、ここで何かを決めるっていうことではなく、いろんな論点がありますから、問題点を洗い出していただけだと思います。育成型選抜の運用に関しても、こういう1つの例がありますので、現状の問題点とかコメントいただければということで、いかがでしょうか。

<松本和委員>

入試に関する書類は結構電子化されて早くなっています。育成型選抜の出願の時にはほとんどの生徒の調査書を職員で分担して点検しますので、一般入試の出願は昔にくらべて楽になっていると思います。ただ、地域にもよると思いますが、吉野川市ではできるだけ不合格を少なくしようという進路指導の方針なので、出願の前日は徹夜が当たり前で、朝の3時4時に保護者と最終の相談をしているというのが現状です。日程が早くなろうが遅くなろうが、日程に関わらず、出願の前日が勝負になると思います。これが全県一区になった時に、不合格をできるだけ出さないようにするような進路指導が難しくなり、第2次募集選抜に出願する生徒が増えてくると思います。3回目の入試という負担が増えるのかなとは思いますが、DA方式は中学校の入試事務の負担軽減にも繋がりますし、ありがたい方式だと思います。

<鳴川委員>

私は体育教師としてスポーツをメインに考える立場から、違う観点の意見になります。現在の育成型選抜が2月の1週目ですが、これを4週目にするとなると、スポーツの優れた生徒が早い段階で県外に流れるおそれがあります。スポーツだけでなく勉強に優れた生徒もそうかもしれないですが、授業料が無償化ということもあって、県外を視野に入れてくる生徒も増えるのではと思います。大学受験でも早めに決めたいという流れになってきています。ですので、2月の4週目の日程にすると、早めの受検で私学に流れてしまうのではないかなという気がします。総合的に考えてDA方式には賛成です。

<竹内副会長>

生徒や保護者の「複数回受検」の希望が議論のスタートであると思いますので、そこを考慮した入試制度にしていく必要があると感じています。

<山下委員>

一長一短あるだろうなということに尽きるのですが、いずれにしてもどのタイミングで負荷がかかるか、からないかという話からは逃れられない部分と、それから次の議論のWeb出願の仕組みとセットで考えていかないと、なかなかこの単体でスケジュールだけでこれ以上の議論は難しいかなと思います。

<金西会長>

ありがとうございます。議論していただいでいくつか観点は出てきたかなと思います。どちらにしても日程等の形態に関しては一長一短ありますので、ここで結論出すという話ではありませんし、時期によって受ける生徒さんの受け止め方も色々ありますので、県外

の私学への流出のご指摘もあったように、1つの大きな観点ではないかなと思います。今後はこの辺を整理して1つの議論の要素にできればと思います。ありがとうございます。

それでは次の議論で高校入試のWeb出願システムの件に移りたいと思います。よろしいですか。それでは事務局から説明をお願いします。

(議題)

事務局より、「資料3」に基づき説明。

<金西会長>

ありがとうございます。高校入試のWeb出願に関してご意見はいかがでしょうか。大学入学共通テストも今年度からWeb出願に切り替えましたが、高校の現場で混乱とかなかったでしょうか。

<木屋村委員>

高校生は特になかったです。最近の生徒はスマホを巧みに使いこなします。保護者が気にして高校にたずねる家庭はありましたが、問題はなかったです。

<鳴川委員>

本校の場合是一件あって、携帯のメールアドレスを9月以降に変更したばかりに出願の書類の打ち出しができず、当日大学で手続きをして打ち出したということがありました。それ以外は特に問題はなかったです。

<金西会長>

全面的に新しく導入すると現場では混乱があるかもしれませんが、中学校側はどうですか。

<松本賢委員>

メリットは大きいと思われしますので、計画的に進めて欲しいと思います。ただ、生徒の個人情報や機密情報を扱いますので、絶対的な安全性や信頼性が担保でき、問題ないと判断されるような方法を慎重に取っていただきたいと思います。賛成です。それと、徳島市の教育委員会教育長としてですが、現在、徳島市立高校と県立高校では違った受検料の支払い方法をとっており、この点が検討課題の一つであるにご指摘いただきました。この点は持ち帰らせてもらって、検討をした上で、できるだけ手間がかからないような形を考えていきたいと思います。

<金西会長>

ありがとうございます。Web出願になるとクレジットカードなど支払いになると思います。その辺も大変かと思います。

<松本和委員>

質問です。大学入試では願書は生徒がオンラインで出願して、調査書は高校がオンラインでそれぞれの大学に送っているのでしょうか。

<木屋村委員>

紙で送っています。厳封して生徒に渡して出願しています。

<金西会長>

徳島の場合、次期の小中の校務支援システムが入れば、調査書に関してはデジタルで高校にデータが行く形になると思います。そこはシステム上で連携が取れますので、紙で送らなくてもよいということになると思います。ただ、それぞれの生徒さんや保護者の方がしないといけないことも出てくると思います。

大学入学共通テストで、出願を忘れる生徒はいかなかったんでしょうか。

<木屋村委員>

高校の保護者も、中学生の保護者も、就学支援金などオンラインで入力しているので、入力することについては、丁寧な説明は必要かと思いますが、問題なくやっていくと思います。

<滝川委員>

このシステムが運用されるようになるのは大変ありがたいと思います。先ほど松本教育長からもありましたとおり、安全面等をしっかりと整えていただいて、有効に活用されるようになればと思っています。

<山下委員>

基本的には Web 出願システム導入の方向に行く方がいいだろうなと思っています。確認ですが、学区制の撤廃にあたって、この Web 出願システムの導入というのは前提条件なのかどうなのか。この議論とどういう風に結びついて、先ほどのシステムと多分セットで語っていかないとなかなか判断が難しいなという風に思っておりまして、資料に記載されていることには全く異論はないのですが、これはどういう位置付けでこの議論をすればいいのかというのがあります。

<金西会長>

DX の話で、もちろん Web システムがありきの前提ではないと思いますが、多分前回もありました併願制とかの処理のこと考えた時に、あれを紙ベースでやるのかどうかそんなこと考えた時には、やはりそれは出てくると思います。別に紙でできないことはないと思いますが、大変な作業になると思いますので。

<木屋村委員>

今も中学校の先生方が高校まで願書を持参しています。中には遠距離の高校もあります。重要な書類や資料を先生方が手分けをして出願していますので、そういうことも考えると、かなり安心な業務になると思います。

<山下委員>

この手の導入にあたっては、紙と Web システムの仕組みを二重にしまうと色々とト

ラブルが出るものなので、Web 出願にされるのであれば、思い切って舵を切った方がいいと思います。

<竹内副会長>

Web 出願システムは中学校の業務負担軽減において非常に有効な手段だと思いますが、それ以上に生徒が自分で出願するというところに大きな意義があると感じました。今回の議論は生徒の主体的な進路選択をいかに実現していくかということがテーマとしてありますが、それを考えた時に、自分で入力して自分で出願するという作業自体が、子供が自立していく第一歩になるのではないかなと思います。また、入力内容自動チェック機能により入力漏れを防止できるというのは非常に大きいと思います。導入当初には web 出願システムに戸惑う子供や家庭があることを考えて、サポートできる体制を考えておく必要があると思います。Web 出願システムの導入は生徒の主体的な進路選択においても非常に有効な手段ではないかなと感じました。

<金西会長>

ありがとうございます。Web 出願システムについては概ね賛同が得られたと思います。それでは、その他に移りますが、こちらの方は特に用意した議論はございませんが、委員の皆様方から何かその他の議論とかございますか。

(なしの旨の返答)

なさそうですので、事務局は何かございますか。

<事務局>

1点、委員の皆様にお諮りしたいことがございます。本日第3回の入試制度部会をもちまして、今年度の部会は一区切りとなります。第1回から第3回までの議論を整理し、親会議である「在り方検討会議」へ報告する予定となります。つきましては第1回、第2回の概要に今回の概要を加えて整理いたしまして、親会議への報告案として事務局で作成をし、委員の皆様へのメールでお送りさせていただいてご確認をお願いする予定にしております。この進め方でよいかどうかお伺いをしたいと思います。

<金西会長>

はい、ありがとうございます。中間取りまとめのようなものを親会議の方に報告できればということでございます。原案を皆様の方にメールで回覧させていただきまして、また何かコメント等あれば事務局の方にいただければと思いますので、そういう形で進めさせていただきたいと思いますがよろしいでしょうか。

<松本賢委員>

1点よろしいでしょうか。徳島市教育委員会として徳島市立高校を抱えております。設立趣旨に、「徳島市の子どものために」というのがございます。時代の趨勢で、全県一区になった場合、これまでの実績から、徳島市内の生徒が市外に出るということは、すくの

うございます。遠距離通学をしてまで市外に出るといのは少なくなっているのが現状です。今の制度から全県一区という本来の形に戻るといことでしょうかけれども、現状から見るとやはり徳島市内の中学生にとって不利な状況と言わざるを得ません。最も影響を受けるのは徳島市内の中学生になることを徳島市の教育委員会の教育長として伝えたいといことです。中学生にとって、まず学力を向上させるのが1番だと思ひます。そのため徳島市教育委員会としてやっていかなければならないこと、それから徳島市立高校があるから県教育委員会も徳島市内の学校として考えていただきたいことといのは、いくつもあると思ひます。徳島市立高校も県立と同じような形で、進路選択をする中学生の不安やいろいろなハードルを少しでも緩和してもらえよう形を考えてほしいと思ひます。滝川委員、いかがでしょうか。

<滝川委員>

その両立といひますか、もちろん県全体の話をしていひますが、制度が変わる中で、市立高校がこれまで果たしてきた役割や、徳島市内の生徒たちが自らの進路選択において、より希望に沿った形で進められるよう今後、検討頂けますと幸ひです。

<金西会長>

貴重なご意見をいただき、ありがとうございます。まず大前提として、徳島市立高校や徳島市の生徒が不利になるような事態は、決してあつてはならないと考えておひります。一方で、人口減少や社会的な要請もあり、また入試制度改革の議論の根底にあるように、現代の多様な世界において生徒たちのニーズも非常に多様化していひます。こうした多様なニーズを的確に汲み取り、生徒たちがより幅広い進路選択を十分に行えるような方向で検討を進めていければと考えておひります。もちろん、この検討の場には市立高校側も加わり、共に考えていく場として設定しておひりますので、ぜひ今後とも貴重なご意見をいただければ幸ひです。よろしくお願ひいたします。

では、中間報告の進め方は先ほどの形でよろしいでしょうか。

(委員一同了承)

<金西会長>

はい、ありがとうございます。ではそのように進めたいと思ひますので、事務局は準備をよろしくお願ひいたします。

それではその他、ございひますか。

私の方から1点提案がございひます。来年度の話ですが、当初の予定では2回を予定しておひりますけれども、それを3回ぐらい回数に増やせていただいた方がよろしいかと思ひます。メールで審議といひよりは、きちんとお会いできてお話しできた方がよろしいかと思ひますので、日程を追加する案ですが、いかがでしょうか。

(委員一同了承)

<金西会長>

ありがとうございます。委員の皆さまも色々スケジュールされているかとは思いますが、会議の都合上、増えるということでご了承いただければと思います。よろしく願いいたします。具体的にいつするかはまたお諮りすることになります。

それでは、本日予定しておりました議題は以上でございます。本年度、計3回の部会を開催してまいりましたが、本日で一区切りとなります。委員の皆様にはご多忙の折、熱心にご議論いただき、多角的な視点から貴重なご意見を賜りました。おかげさまで、非常に意義深い議論を積み重ねることができたと感じております。

徳島県における新しい入試制度、そしてこれからの学びを構築していく上で、人口減少という極めて大きな課題にどう対応していくかは不可欠な視点です。何より「生徒が不利にならないこと」、そして「彼らがこれからの新しい社会で生き生きと活動できる方向性」について、本会を通じて少しでも議論を深めることができたのであれば、非常に喜ばしいことです。

今年度の部会はこれで終了となりますが、皆様のご協力に心より御礼申し上げます。来年度も引き続きこの検討は続いてまいりますので、またよろしく願いいたします。以上、私からの挨拶とさせていただきます。

それでは事務局、よろしく願いします。

(事務連絡)

(閉会)